

「大森林」の「アメリカ人」

——「熊」についての一考察（3）——

井 上 勝

I

私は「熊」(“The Bear”, *Go Down, Moses*, 1942)の第IV章におけるアイザック・マッキャスリン (Issac McCaslin) の「『とにかく彼 [ヒューバート・フィッツ=ヒューバート・ビーチャム] はそこをウォーリックと呼んだ』、たとえそれ以上ではなかったとしても、少なくとも一度は」(‘Anyway he called it Warwick’: once at least, even if no more.)⁽¹⁾ という言葉を一つの手懸りとして、『紀要』第14号においては「フォークナーはアメリカ人か」と題し、また第15号においては「『ウォーリック』の意味するもの」と題して、「熊」についての考察を試みてきた。それはフォークナー (William Faulkner, 1897~1962) における「アメリカ人」であることの意味を問いたかったからにほかならない。またそれがフォークナーのいわゆる「ヨクナパトウファ・サーガ」(the Yoknapatawpha saga) を理解するための一つの鍵であると信じたからである。けれども、それはあくまでも一つの鍵であって、それがすべての「ヨクナパトウファ」ものを理解するための鍵になりうるとは思っていない。しかし、もし人は自分に見えるものを、あるいは自分の見たいものをしか見ないのであり、また自分の見うるものによって制約を受けているのであれば、一つの試みがいささか無謀であったとしても、それは許されるものと思われる。

そして、今回は「『大森林』の『アメリカ人』」と題している。断っておかなければ

「大森林」の「アメリカ人」

ればならないのは、ここで言う「大森林」とはいわゆる密林を連想させる大きな森林という意味でのそれではない。「大森林」とはアイザックが10歳のときから狩猟に参加させてもらっており、サム・ファーザーズ (Sam Fathers) を師として狩猟の道を学び、ついには16歳になったとき年老いた巨熊が倒されるのを目撃した森林のことである。そしてまた、アイザックが年老いた巨熊の倒されるに至るまでの過程を目撃し、その過程を自分の内部に溶かし込むことによって自己の存在基盤を確立していった森林のことである。技術文明による開発が着実に推し進められているなかにあつて処女地アメリカ大陸の原形をいまなお留めている「新世界」の本来の姿としての森林のことである。したがってまた、ここで言う「アメリカ人」とは広く一般的にアメリカ合衆国々民のことを言っているのでは無論ない。「熊」において、アイザックを介して提示されているアメリカ人像とも言うべきものである。

ところで、私は第14号において次のようなことを指摘した。年老いた巨熊すなわちオールド・ベン (Old Ben) は、一方においては子豚や子牛などを襲ったりして人間の世界に危害を加え、そのために人間側からの反撃にあつて体内には鉛の弾丸を撃ち込まれたりしている現実の動物であり、他方においては、「死滅した大昔から現われ出た不撓不屈にして無敵の時代錯誤」(an anachronism indomitable and invincible out of an old dead time)⁽²⁾ であるとされ、また「昔の野性の生命の、一つの幻、一つの縮図、一つの神格」(a phantom, epitome, and apotheosis of the old wild life)⁽³⁾ であるとされているということである。そして、年老いた巨熊、オールド・ベンと「大森林」(the big woods) とは不可分の関係にあると指摘した。もしオールド・ベンが実在する現実の動物である一方において、非現実的な幻の動物でもあるのならば、それと不可分の関係にある「大森林」もまた、一方においてはジェファソン (Jefferson) の町から当初は30マイルのところに位置し、オールド・ベンの死を契機にして木材を切り出されたがためについには町から200マイルも離れたところへ加速度的に退却していった現実の森林であり、他方においてはそれを殺すつもりさえないアイザックたちのオー

「大森林」の「アメリカ人」

ルド・ベンとの「年毎のランデヴー」(yearly rendezvous)⁽⁴⁾ という奇妙な狩猟の行なわれる「非現実の」、*「幻想の」*森林であるということである。ここで、その「大森林」はド・スペイン少佐 (Major de Spain) の所有物でもあったということをつけ加えておかなければならない。

第15号においては、黒人奴隷を獲物とする牧歌的に描かれてはいるが残酷な狩猟の行なわれるビーチャム (Hubert Fitz-Hubert Beauchamp) の屋敷が Warwick と呼ばれているということを、またそれがイギリスの Warwick と少なくともビーチャム家の人によって結びつけられており、さらには両者が不可分の関係にあるとされているということを、それがために、ビーチャムの屋敷が「一方を他方の上にして同じ区域の土地に別々の二つの農園」(two separate plantations covering the same area of ground, one on top of the other)⁽⁵⁾ となっているかのような錯覚を与えているということを指摘した。このことから、私は、南北戦争前夜のアメリカ人は「新しい土地」であるアメリカにあってもなお「旧世界」の土地であるイギリスとの関係において自らの位置づけをしようとしていると結論した。

以上のことから、オールド・ベンであれ、あるいは「大森林」であれ、またビーチャム家の屋敷であっても、そのいずれもが現実と非現実もしくは幻想という二つの違った意味を付与されて描きだされているということが理解できる。それぞれが二つの違った意味を与えられているということのなかに、より直接的にはビーチャム家の屋敷の二重性のなかにアメリカ人とアメリカの大地との関係が読みとりうるであろう。アメリカ人の有り様を現実として見るとき、アメリカの大地は虚構の土地となる。逆にアメリカの大地の有り様を現実として捉えてみると、アメリカ人は地面から遊離した根無し草となり、幻となってしまう。アメリカ人とアメリカの大地との関係は奇妙な二重性を有しているということである。つまりアメリカ人はアメリカの大地から遊離しているのである。アメリカの原初の姿をしている「大森林」においての狩猟を通して大地と人間のあるべき姿を理解したアイザックが彼らの所有する土地は「呪われている」といい、「穢

「大森林」の「アメリカ人」

されている」というとき、その「呪い」そして「穢れ」とはこの「大地と人間の遊離」に起因しているものにほかならない。

ユングを援用しつつ、アイザックの「大森林」での経験の意味を解明し、「呪い」や「穢れ」と対峙するアイザックの姿に宗教的な色彩がほどこされていることを読みとりつつ、一段と高い次元の人間へと変身したアイザックをして「新世界の英雄」とするR・W・B・ルイス(R. W. B. Lewis)が「アイク・マッキャスリンはフォークナーの登場人物のなかでアメリカの歴史を理解する最初の人物である」(Ike McCaslin is the first of Faulkner's characters to understand American history)⁽⁶⁾と述べているように、アイザックはアメリカの歴史の総体的な観点から「呪い」や「穢れ」の意味を探ろうとする。また、宗教的要素に力点をおいて「熊」を解釈し、人間は罪を受容することによって人間性を獲得しうるとするO・W・ヴィカリー(Olga W. Vickery)が「アイザックの歴史の解釈は聖書的である」(Isaac's interpretation of history is Biblical)⁽⁷⁾と述べているように、アイザックは「呪い」や「穢れ」の意味を神と人間の関係において捉え、それをアメリカの歴史のなかに見出していこうとする。「呪い」や「穢れ」すなわちアメリカ人のアメリカの大地からの遊離は人間が大地を所有するものとなり、土地が人間に所有されるものになるという関係が発生したときに生じたのである。その関係はコロンブスのアメリカ大陸発見を契機とする「旧世界」の人間のアメリカへの移住によって生じた、とアイザックは言う⁽⁸⁾。しかし、「旧世界」の人間がアメリカへ移住して土地を所有したというのは「呪い」や「穢れ」の付加的な要因でしかなく、彼ら白人がアメリカへ移住する前からそこに住んでいるインディアンにおいても事情は同じであった。アメリカの大地はインディアンが土地を所有したまさにその瞬間から「呪われて」いたのであり、「穢されて」いたのである⁽⁹⁾。したがって、アメリカの大地は当初から人間から遊離したもの、というよりもアメリカ人はアメリカの大地から遊離した存在と化していたのである。先に私は「旧世界」の人間がアメリカへ移住してきて土地を所有したのは「呪い」や「穢れ」の付加的な要因でしかないと書いたけれども、彼らはしかし同じ

「大森林」の「アメリカ人」

人間（黒人）をも物として所有するという奴隷制度をアメリカに持ち込むことによって、「呪い」や「穢れ」を一段と強烈なものにしていったのである。

以上が歴史的に見た「呪い」や「穢れ」ということになるが、これだけではなぜ「呪い」が「呪い」であり、「穢れ」が「穢れ」であるのかは判然としない。そこにヴィカリーの言う「聖書的な」要素を加味しなければならない。神が人間を創造したのは神の代わりに監督者としてすでに創造しておいた物を言わない生き物たちを監督してもらうためであって、土地を自分のものとし、それを子孫に受け継いでいってもらうためではなかった。そして神は人間に報酬を求めることになるが、その報酬とは「同情と謙譲と許容と忍耐と食のための顔に流す汗」(all the fee He asked was pity and humility and sufferance and endurance and the sweat of his face for bread)⁽¹⁰⁾であった。だが、人間は神から「エデンの園」の奪い取ったばかりか、お互いに奪い合うことになった。そこで、神は取るに足らない一個の卵を使って「新世界」を見せてくれたのである。人間の「旧世界」から「新世界」アメリカへの移住というのも、「神が、同情と謙譲と許容と忍耐があればという条件で、同情と許容の気持から、あの旧世界の墮落した無価値な黄昏から彼らを連れてきてくださった」(He had vouchsafed them out of pity and sufferance, on condition of pity and humility and sufferance and endurance, from that old world's corrupt and worthless twilight)⁽¹¹⁾ということであった。このようなことが神と人間の関係となっているのであれば、人間が土地を所有し、さらには同じ人間をも物として所有することが如何に「呪われて」いることであり、「穢れて」いることであるかがわかる。マッキャスリン家の嫡子であるアイザックはだから「サム・ファーザーズが私を自由にした」(Sam Fathers set me free)⁽¹²⁾という言葉からも理解できるように、「大森林」においての経験をもう一つの力として、自らが相続すべき農園の相続を放棄し、マッキャスリン農園を離れるのである。そしてキリストにならって大工となる。だが、アイザックがマッキャスリン農園の相続を放棄しても、その農園そのものが解体されるのではない。本来の姿に戻されるのではない。マッキャスリ

「大森林」の「アメリカ人」

ン農園はマッキヤスリン家の始祖であるルーシャス・クィンタス・キャロザーズ・マッキヤスリン (Lucius Quintus Carothers McCaslin) の娘の子孫の所有物となって、相続されていく。アイザックの農園の相続放棄は「呪い」や「穢れ」からの自由を、解放を意図してなされたのであるから、マッキヤスリン農園そのものが解体されないかぎり、彼の放棄の意味は失くなってしまいうだろう。解体されないかぎり、マッキヤスリン農園はすなわち土地は人間の所有物であることに変わりはないからである。あるいは、農園は所有され、相続されていくのであるから、「呪い」や「穢れ」はそれほどまでに深いものであり、決して消し去ることのできないものとなっているということであろうか。

II

もう一度、アイザックがサム・ファーザーズを師として狩猟の道を学ぶことによって、自己の存立基盤を確立していった「大森林」での事件に触れてみたい。

アイザックは10歳のときに初めてオールド・ベンの「年毎のランデヴー」という奇妙な狩猟に参加させてもらって以来、徐々に猟師としての資格を身につけていく。彼が「鉄砲」や「時計」や「磁石」を一つ一つ身から外していき、外しきったときに「大森林」の主、オールド・ベンは彼の前に姿を現したのであった。アイザックが文明の衣裳をすべて脱ぎさって一人の裸の人間として「大森林」を歩き回れるようになったとき、彼が「森の住人」、すなわち一人前の猟師である資格は生まれたのである。こうしてアイザックは一人前の猟師となる。

アイザックが一人前の猟師となってから、彼らは一頭の野性の犬を捕獲し、その犬を使ってついにはオールド・ベンを倒す。オールド・ベンの息の根をとめたのはブーン・ホガンベック (Boon Hogganbeck) のナイフであった。オールド・ベンの死んだときの姿は次のように描かれている。

それから夜明になったそして彼らはみんなして庭へ出てオールド・ベンを見た、

「大森林」の「アメリカ人」

オールド・ベンもまた眼を開いており、うなるかっこうの唇からは擦りへった歯がむきだしになっており、一本の足はかたわらになっており、皮の下には古い弾丸の小さな固いこぶ（鹿弾やライフル銃の弾や弾丸で52あった）があり、左肩の下にブーンのナイフの刃がついには息の根をとめた一つのほとんどそれとは見わけのつかない細長い切り口があった。

Then it was dawn and they all went out into the yard to look at Old Ben, with his eyes open too and his lips snarled back from his worn teeth and his mutilated foot and the little hard lumps under his skin which were the old bullets (there were fifty-two of them, buckshot rifle and ball) and the single almost invisible slit under his left shoulder where Boon's blade had finally found his life.⁽¹³⁾

前にオールド・ベンは人間の世界に危害を加え、そのために人間側からの反撃にあって鉛の弾丸を撃ち込まれている現実の動物であると書いたが、ここで弾丸の数が具体的に何発であったかが明らかにされる。わざわざかっこでくくって52発としてある。それに加えてブーンのナイフの刃による「一つのほとんどそれとは見わけのつかない細長い切り口」がある。そしてそれがついにはオールド・ベンの息の根をとめたとある。なぜ、フォークナーはオールド・ベンの体に撃ち込まれた弾丸の数を52としたのだろうか。この作品、『行け、モーセ』の最初に出てくる“Was”において、ポーカーの勝負が一つの決定的な役割を果していることを知っている読者はトランプとの関係においてその数字の持つ意味を考えるとしよう。また、「熊」においても、オールド・ベンが倒されるまでにポーカーをやっている場面に三度出会えば、一層強くトランプとの関連においてその数字について考えてみたくなるだろう。52という数字は、言うまでもなくトランプの4種類のマークの数を合計したものである。それに、とくにポーカーのゲームにおいては何でも好きな札になれるジョーカーを1枚加えると、一組のトランプの札の総数となる。

「大森林」の「アメリカ人」

“Was”において、ポーカーはトランプによる単なる一つのゲームではなかった。私は第15号において、「ヒューバートとバディーおじさんのポーカーの勝負によってトミーのタールの行く末は決められるということになっている。またその同じ勝負によって、ミス・ソフォンシバとバックおじさんの結婚も決められてしまうことになっている」⁽¹⁴⁾と指摘したが、つまりポーカーはしたがってトランプは人間の運命を決定するものとなっている。このことから考えれば、52という数は52発の弾丸を撃ち込まれているオールド・ベンの死が運命的なものであったということを言わんがための一つの材料であるといっていいたいだろう。「大森林」は滅びることを「宿命づけられて」いるのであり、それと不可分の関係にあるオールド・ベンもまた死ぬことを「宿命づけられて」いるとされているからである。トランプとの関連において言えば、それだけでは十分な説明にはならないように思える。

“Was”において、トミーのタール (Tomey's Turl) の行く末やバックおじさん (Uncle Buck) とミス・ソフォンシバ (Miss Sophonsiba) の結婚がポーカーの勝負によって決められたのは Warwick においであった。そして、その Warwick はすでに指摘したようにイギリスの Warwick と結びつけられていた。ポーカーの片方のプレーヤーであるビーチャムにとってはイギリスの Warwick そのものであると言ってもいいものであった。であるとすれば、いずれの場合においても運命を決めるトランプを媒介にして“Was”の Warwick がそのまま「熊」の世界に持ち込まれていると言ってもいいであろう。

オールド・ベンの体には52発の弾丸が撃ち込まれている。ということはトランプの札がジョーカー1枚を残してすべて使い尽くされているということになる。手元に札が配られることはもはやなくなってしまった。したがって、ヒューバートたちのポーカーは今となってはしたくてもできない状態になっている。Warwick は、それがまたイギリスの土地でもあれば、かつてのアメリカの支配者イギリスはすでにオールド・ベンの体に封じ込められていたのである。とくにポーカーにおいては何の札にでもなれるのがジョーカーであれば、逆にジョーカーの

「大森林」の「アメリカ人」

役割を果すものが何であってもいいということになる。その場により相応しいものであれば、なおいいということになる。オールド・ベンにたいしてはブーンが、ブーンのナイフの刃がジョーカーの役を果す。そして、それはすべてを決する。ブーンのナイフの刃がオールド・ベンの息の根をとめるのだ。トランプの札は、ブーンのナイフという形で文字通りすべて使い尽くされてしまう。アメリカにおける Warwick は、アメリカにおけるイギリスはオールド・ベンとともに死んだのである。「大昔から現われ出た時代錯誤」は死んだのである。もはや時を刻むことはできない。「大森林」の主である年老いた巨熊の名前がオールド・ベンとなっているのは、あるいは英国国会議事堂塔上で時を刻み続けている Big Ben のことをも言っているのかも知れない。なぜならば、メイフラワー号で神の国の建設を目指して「旧世界」から渡って来て、アメリカを植民地としたのはほかならぬイギリス人であり、イギリスであったからだ。

倒されるものがおれば、当然倒すものがある。倒されたもの、「大森林」の主である年老いた巨熊オールド・ベンに前述のような意味づけが可能であれば、それを倒したものについても同様の意味づけがなされなければならないであろう。

オールド・ベンを打ち倒したのは一人ブーン・ホガンベックだけではない。オールド・ベンの体には52発の弾丸が撃ち込まれているのだから、他に52人にも及ぶ人間が関わりあっていることになる。52人のなかにはアイザックの一行のド・スペイン少佐やコンプソン将軍 (General Compson) のような人もいる。しかし、彼らの多くは「大森林」の周辺に住む人たちである。そのように見ると、ブーンは最後の仕上げをしたにすぎないとも言うるが、しかし、彼の果した役割は大きい。何よりも、彼が用いた道具は鉄砲ではなく、ナイフであるということが他の人たちとは違う。彼は繰り返して言えば、ポーカーにおいて何の札にでもなれるジョーカーの役割を果したのである。それにサム・ファーザーズがいて、野性の犬、ライオン (Lion) がいる。この一員にアイザックを加えることはできない。彼は一人の「目撃者」でしかないからだ。そして、この三者について言えることは、人間なら混血であり、犬なら雑種であるということである。

「大森林」の「アメリカ人」

ブーンはチカソー族 (Chickasaw) の女の孫で、4分の1だけインディアンの血が混っている46歳の男である。身長は6フィート4インチもある大男であるけれども、子供の心く別の個所では彼は「生まれてこのかた10歳」(Boon had been ten all his life)⁽¹⁵⁾ を持ち、馬の心臓を持つ男とされている。めっぽう酒が好きで、飲んだときには父親は純血のチカソーであり、母親も半分の白人でしかないと張り誇る男である。鉄砲を使うのがまったく下手で、10フィートの至近距離でも当てることができない。そのような鉄砲の使い手であれば、彼が熊を倒すにあたって鉄砲を使わずに、極めて原始的なナイフを用いるのは当然である。彼が獲物を倒すのにナイフしか使えないのであれば、彼に見出せるのは自然人に近い人間の姿である。しかし彼はインディアンと白人の混血であり、たとえ酒を飲んだときでしかなくても、インディアンの血の方が濃いと主張する男である。種族としてのインディアンもまた、土地を所有した段階で、それを「呪われた」ものとし、「穢し」ているのであれば、必ずしも自然人としてのみブーンを位置づけることはできないだろう。むしろ、先住民族インディアンとの関係において位置づけたほうがいい。サム・ファーザーズは黒人奴隷女とインディアンの王との間に生まれた人であるからインディアンと黒人の混血である。彼は「大森林」における狩猟においてはアイザックの師である。またアイザックに様々な美德を教える。オールド・ベンを倒すにあたってはすべてを知悉している人間である。オールド・ベンを倒すに相応しい犬を罠にかけて捕獲するのも彼である。そして、野性の犬、ライオンには10種類以上もの血が混っている。肩幅は30インチ以上あり、体重は90ポンドはあると思われている犬である。この犬を狩猟の師サム・ファーザーズは2年の歳月をかけて、馴らすことなく、あくまでもオールド・ベンを倒すに相応しい犬に仕立てあげる。

これらの力が総合されたとき、オールド・ベンは倒されたのである。これは混血の勝利であるとも言える。そして、その混血はインディアンと白人あるいはインディアンと黒人というようにインディアンを中心にしたものである。あまりに図式的になるが、アメリカの大地との関連において考えてみると、黒人も白人も

「大森林」の「アメリカ人」

別の大陸から渡ってきた移住者でしかないのだから、この一員に黒人と白人の混血が加わっていないのは当然であると言える。ここではあくまでも先住民インディアンを中心にした関わりかたをしたものでなければならぬように思える。同様に純血の白人も純血の黒人も純血のインディアンもここには加えられていない。あるいはここにアメリカの未来像を見るフォークナーの眼があるといってもいいかも知れない。すでに『アブサロム、アブサロム！』(*Absalom, Absalom!*, 1963)において、(この作品では黒人と白人の混血の問題として)そのことを示しているからだ⁽¹⁶⁾。

III

「大森林」はアイザックの一行が猟をしたときにはド・スペイン少佐の所有物であった。人間は土地を所有してはならないとアイザックは言う。人間が土地を所有することによって土地は「呪われた」ものとなり、「穢された」ものになる。それはまたその土地に住む人間も「呪われた」ものになり、「穢れた」者になるということであった。アイザックは土地の所有者とならないために、自らが相続すべきマッスリン農園の相続を放棄し、大工となる。それが彼にとっては一つの救いとはなる。しかし、所有物としての土地が解体されないかぎり、本当の救いはない。

彼が修業をつんだ「大森林」もまた所有物であれば、そこも「呪われて」いるのであり、「穢されて」いることになる。しかし、Iにおいて指摘したように、「大森林」はアイザックの修業を可能にする幻想の森でもあった。「大森林」は「現実の町での社会生活を営む白人もおれば、黒人もおり、赤色人すなわちインディアンもいるのだが、そういった人種的なあるいは社会的な違いというのはまったく問題でさえない、あくまで一人一人が一人の裸の人間として存在することが許され、それが可能である」⁽¹⁷⁾世界である。そのなかに町での姿とは違うブーンがいた。あるいはサムがいた。彼らは行為者であった。アイザックは目撃者であった。目

「大森林」の「アメリカ人」

撃者にしかなれなかった。人は行為者になったとき、何かを達成するのである。「呪い」や「穢れ」に立向かう者としてフォークナーは「熊」の「大森林」においてはインディアンと白人の混血とインディアンと黒人の混血を配したのである。

〔注〕

- (1) William Faulkner, *Go Down, Moses* (Random House, 1942), p. 307.
- (2) *Ibid.*, p. 193.
- (3) *Loc. cit.*
- (4) *Ibid.*, p. 194.
- (5) *Ibid.*, p. 9.
- (6) R. W. B. Lewis, "The Hero in the New World: Faulkner's "The Bear", in Francis Lee Utley, Lynn Z. Bloom, and Arthur F. Kinney(eds.), *Bear, Man, and God: Eight Approaches to William Faulkner's "The Bear"* (Random House, 1971), p. 198.
- (7) Olga W. Vickery, "God's Moral Order and the Problem of Ike's Redemption", in Francis Lee Utley, Lynn Z. Bloom, and Arthur F. Kinney(eds.), *Bear, Man, and God: Eight Approaches to William Faulkner's "The Bear"* (Random House, 1971), p. 210.
- (8) William Faulkner, *Go Down, Moses* (Random House, 1942), pp. 258-9. 参照。
- (9) *Ibid.*, p. 259. 参照。
- (10) *Ibid.*, p. 257.
- (11) *Ibid.*, p. 259.
- (12) *Ibid.*, p. 300.
- (13) *Ibid.*, p. 247.
- (14) 拙論, 『紀要』第15号, p. 77.
- (15) William Faulkner, *Go Down, Moses* (Random House, 1942), p. 232.
- (16) William Faulkner, *Absalom, Absalom!* (Random House, 1964), p. 378.
- (17) 拙論, 『紀要』第14号, p. 56.